

海外での子育てを経験した母親の発達過程

—ドイツ長期滞在日本人家族の母親へのインタビュー調査に基づいて—

Developmental processes of mothers having experienced parenting abroad

—Based on interviews with mothers of Japanese families living in Germany for a long period of time—

嶋 祐子

Yuko Shima

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：文化移動，親子間文化交差

Key words : Cultural migration, Parent-child cultural interchange

1. 研究目的

海外に生活の拠点を移す日本人家族は、これまでは企業派遣型の駐在員家族が大多数を占めていた。海外での居住期間が長期化する日本人家族の中で、近年、自らの意思で滞在国に留まることを選択する家族は増加の傾向にある。しかし、こうした家族の生活の実態については、ほとんどわかっていない。

海外に長期滞在する家族に関する先行研究として、「文化移動をした家族」、「養育行動や親子関係」、「ドイツの家族や青年」の3つの領域を設定し、検討した。これまでに明らかになっている主なこととして、1)米国で長期にわたり子育てをした母親は、自分の価値観を滞在国の文化に合わせることの難しさを抱えながら、日米のふたつの文化を融合させつつ、視野の広がりを獲得している(皆川, 2019)、2)日本人と米国人、中国人の母親の間には「しつけ感」に違いがみられる(金崎, 1997)、3)児童(8歳児)の自己概念については、日本人児童は協調性を重視する傾向があるのに対して、ドイツ人児童は独立性重視の傾向を示す(小林, 1998)などである。総合すると、海外での居住が長期化する日本人家族の母親は、日本の文化を基盤にして、現地の文化の中で成長する子どもを育てる難しさを抱えることが考えられる。また、母親の子育ての「困難さ」は、親の文化(日本文化寄り)と、子どもの文化(現地文化寄り)とが交差することにより生じていることになる。

そこで本研究では、母親が文化交差を乗り越える過程を、異文化下で子育てをする母親が子ども

を通して現地の文化を学びながら発達する過程であると捉え(柴山, 2010)、母親の解釈の変化を明らかにすることを目的とする。

研究のフィールドにドイツを選んだのは、以下の理由による。ドイツの学校制度は4-9/8制(分岐型)であり、日本は6-3-3制(単線型)である。また、子どもの思春期の年齢での社会的な規範にも違いがある。例えばドイツでは、飲酒が合法になる年齢も、ピアスや男女交際に関わる習慣も日本とは異なる。子どもを取り巻く社会的な環境が大きく異なる国を取り上げることで、母親の文化交差の経験があらわれやすくなるのではないかと考えた。

2. 研究実施内容

2-1. 研究方法

(1) 研究対象者：2023年時点で、ドイツでの滞在年数が20年を超え、子どもを現地校に通わせた日本人家族の母親3名とした。

(2) データ収集法：Zoomを用いて半構造化インタビューを行った。1回2・3時間であった。研究実施者(筆者)が許可を得て語り(ディスコース)をICレコーダーで録音し、中間的トランスクリプト形式を採用して文字化(逐語録)した。

(3) 分析：「解釈的アプローチ」に依拠した質的研究を採用し(柴山, 2023)、「モデル(仮説)生成型」研究を目指した。また、データ分析手法としてディスコース分析(能智ほか, 2013)を行った。具体的には、ディスコースを読み込む中から鍵となる20の概念を拾い出し、概念を束ねて6つのカテゴリーを生成した。カテゴリーは「現地のコミュニ

ティへの参加」, 「日本のコミュニティへの参加」, 「学校のコミュニティへの参加」, 「社会のコミュニティへの参加」, 「異なる社会的規範への参加」, 「多様な価値観への参加」であった。データの分析枠組みには, 「導かれた参加」(ロゴフ, 2010)を援用し, 母親と他者の中で意見が交わされ「意味の橋渡し」が行われている場面に注目して分析した。

2-2. 研究倫理への配慮

本研究は, 大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号: 04-035)。

データの収集と取り扱いについては, 匿名化し田尾商社が特定されないように十分配慮した。データの処理と分析には, 不正なアクセスや外部漏洩が生じないように, セキュリティ対策を講じた。研究実施の全過程において対象者と常にラポールを形成し維持することに努め, 協力の同意の撤回もいつでも行えることを伝えた。

2-3. 結果と考察

(1) 母親の現地のコミュニティへの参加の仕方を, 導き手と文化的道具(言語)に着目して分析した結果, 母親の渡航直後から意味の橋渡しの過程にかかわった主な人物は3人であった。1人目は日本語を話す, 現地で知り合った日本人母親であり, 2人目はドイツ語を話す, 現地の人であった。3人目は, ドイツ語も日本語も話せる自分の子どもであった。

(2) 家庭において, 親文化と子ども文化の交差が明瞭にあらわれた話題は, 習慣が異なる規範についてであった。法の定めが異なる規範として, 飲酒や喫煙が, 習慣が異なる規範として, ハグやピアス, 男女交際などが挙げられた(図1)。

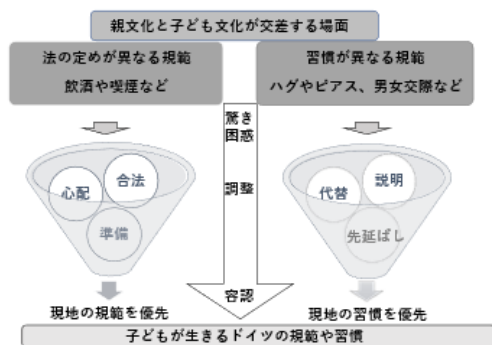


図1. 母親が文化交差を乗り越える過程

飲酒については, ドイツでは16歳で「合法」になるのに対して, 日本では20歳である。母親の文化交差の調整は, 現地の法律を遵守しつつ健康面

からの「心配」を伝えたり, 醜態をさらさないように練習させて「準備」したりすることであった。

習慣が異なる規範については, 母親は, 日本の規範を子どもに「説明」したり, すぐに対応できない時には「代替」のやり方を示したりした。判断を保留して時間を稼ぎ, 子どもとの対話を続ける「先延ばし」も見られた。「先延ばし」は, 子どもの成長を待つ意味があり, 合意が形成されるまでに数年かかることもあった。規範全般についての母親の解釈の変化は, 子どもがこれからも生きるドイツの規範を優先させる方向性を示していた。「先延ばし」は, 母親が, 自身の規範や価値観を変化させる際に生じる心情的な困難さのあらわれである可能性も示唆された。

3. まとめと今後の課題

本研究により, 親子間に生じる, 思春期の頃の文化交差の実態の一端が明らかになった。規範や習慣を巡る話題に対する母親の調整の過程は, これまで未解明であったが, 母親の「困難さ」や解釈の変化が具体的に示された点に本研究の意義がある。

異文化下での子育てを通して母親が発達する過程は, 「自分が成長した日本の習慣や規範を土台に残しながら, 話題に合わせて意味の橋渡しをしてくれる他者を選択しながらコミュニティに参加し, 徐々にドイツの習慣や規範を理解していくという, 解釈の変化の過程である」と結論づけられた。在米長期滞在日本人家族の母親にも同様の発達過程が見られることから, ふたつの国に跨る子育てをする母親に共通する経験と言えるのではないかと。また, 海外で子育てを行う母親たちは日本文化寄りのしつけを行っている点は, 本研究の知見と重なる点であった。現地で成長することにより現地文化寄りになる子どもとの間に, 結果として文化交差が生じることが本研究で示された。

今後の課題のひとつとして, 子どもへのインタビューも行い, 母親の文化交差の経験を共有する子どもの経験を明らかにすることが挙げられる。

主要引用・参考文献

- [1] 能智正博ほか, 2013, 『ディスコースの心理学』ミネルヴァ書房。
- [2] ロゴフ, B/當間千賀子(訳), 2010, 『文化的営みとしての発達 個人, 世代, コミュニティ』新曜社。

[3] 柴山真琴, 2010, 「文化と発達」日本児童研究所, 平木紀子ほか(編)『児童心理学の進歩』 Vol.49, 金子書房, pp.1-26.

[4] 柴山真琴, 2023, 「異文化間教育研究における方法論的確かさに向けて」異文化間教育, 57号, pp.74-88.

付記

本研究は, 大妻女子大学人間生活文化研究所の令和5年度「大学院生研究助成(B)」(課題番号: DB2325)を受けて実施した. 申請時の課題名は「在ドイツ長期居住日本人家族における子育てについての一考察」であったが, 研究計画を精緻化する中で, 研究題目を標記のとおりに変更した.